

傾向と対策 2024

[入試科目別傾向と対策]

〔一般入試A〕

■英語	4
■世界史	6
■日本史	8
■数学	10
■化学基礎	12
■生物基礎	14
■国語	16

※傾向と対策作成：河合塾グループ 株式会社 KEI アドバンス

英語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2 / 3 2 / 4 2 / 5 共通仕様	第1問	空所補充問題 (文法・語法, 熟語)	標準
	第2問	整序英作文問題 (文法・語法, 熟語)	標準
	第3問	対話文完成問題	やや難
	第4問	会話文および広告読解問題	標準
	第5問	長文読解問題	標準
	第6問	長文読解問題	標準

●出題形式

椋山女学園大学の入試は、3日程から試験日を選ぶことができるうえ、最大3日程すべて受験可能で、解答形式はすべてマークシート方式である。2教科型入試の場合、出願する学科によっては必須の科目もあるが、概ね任意の2科目を選択して受験する形式をとり、受験教科は出願時に事前申請する必要がある。試験当日は、教科別に設定されている試験時間割に従って受験することになる。2025年度入試も同様となっている。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ (リスニングを課さない)

b. 出題内容 (大問構成)

文法・語法空所補充問題1題、整序英作文問題1題、短めの対話文完成問題1題、長めの会話文読解問題と広告読解問題によって構成された大問が1題、長文読解問題2題の計6題 (小問数は3日程とも40問に統一)

●問題の傾向

第1問は、単文中の空所に適切な語句を補充する形式である。高等学校の履修内容に沿った出題が主であるが、語感にかかわる問題や、不適切な選択肢を除外することで正解にたどり着くことができる問題もあるため、知識を最大限活用し解答したい。第2問は整序英作文問題で、5つの選択肢を適切な順序に並べかえ、単文中の空所に入れて英文を完成させる形式である。日本語訳がなく、設問によっては2通り以上の英文が出来上がりそうなものもあるが、学習した文法事項や表現を活用することで、ほとんどの問題は正解できる。第3問は、2人の話者による1往復～1往復半の対話内に設けられた空所を補う形式である。口語や発話そのものを文字として記述した表現や、見慣れない熟語も多く、お決まりの応答を使っていない対話もあり、入試問題としては難しい部分も多いが、対話の文脈を丁寧に読解し、話の筋を追っていけば正解することができるだろう。第4問は、長めの会話文読解問題 (小問数3) と、英語で書かれた広告などを題材とした問題 (小問数2) の2つの形式で構成されている。会話文読解問題は、概ね文章中の空所への適切な表現の補充、下線部が意図している意味内容に類する表現の選択、文章の内容に関する問いへの回答を選ぶ問題で構成されている。高等学校のテキストなどでは見かけないが、広く一般的に使われている日常会話表現などが散見されるだけでなく、内容が興味深いうえに、話者の考えや会話の状況が二転三転するような文章もあるので、文章に引き込まれずに客観的かつ丁寧な読解を心がけたい。広告読解問題で使用されている資料は、実際の日常生活で頻繁に目にするレイアウトのものが使用されており、その趣旨から必然的に入試問題で使われない日常生活に根差したレベルの高い表現もあるが、文脈などを用いて文意を推測することで十分に理解できる。第5・6問は、入試標準レベルの単語・熟語や表現を用いた長文読解問題である。空所補充問題、下線部の意味を問う問題、内容に関する発問、真偽を問う問題、タイトル選択問題などが出題されており、それぞれ10問の小問で構成されている。1つの文章における語数はそれほど多くはないが、この文章量を2題分読んだうえで、計20問の小問において解答しなければならないため、入試問題演習にあたる前から、地道に英文を読む習慣をつけておきたい。単語や表現は概ね入試標準レベルではあるが、語注なく、単語・熟語の知識以外を活用して文脈を把握してほしい作問意図も見える。設問も入試標準レベルのものが主であるが、文章のテーマから推測することはできるものの、文章にはない情報を選択肢に設けるものもあるので、丁寧な設問分析をしながら解答を進めたい。

●難易度

生きた口語表現が散見され、設問によってはやや難であると判断されるものの、総じて、大学入学共通テストと同等の難易度である。

英 語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

全体的な難易度は概ね入試標準レベルであるが、高等学校で身につけるべき知識などをフル活用し、しばしば見られる生きた英語表現や興味深い題材に対応して解答する力を測ろうという意図が見える作問である。つまり、60分の試験時間で、相応の読解量と問題数を解くために、日ごろから英語に親しみつつ、授業で学習したことは完全にマスターしたうえで、より幅広い生きた英語に触れておくことが必要だ、ということである。

●授業で学習することはすべて完璧にマスターしておこう

入試を見据えた取り組みでまず行うべきことの1つは、今まで学習したことを学習の始点からすべて復習し、比較的理解に乏しい事柄やミスを重ねてしまうポイントを洗い出し、すべて完璧にしておくことである。それぞれの設問は、時間を気にせずに丁寧に解答すれば正答できるものばかりだが、時間内にあたるべき英語の量や、日常会話で用いられる豊富な表現の使用を考慮すると、時間の制約において厳しい。よって、履修すべき基礎・基本は正しい運用で素早く判断・理解して解答時間に余裕をもたせたうえで、文脈の読解や未知の表現に対応する時間を設けたい。実施された定期テストなどを活用し、時間に余裕をもって満点に近い答案が作成できるように練習するなど、基礎・基本の運用力の強化から始め、入試当日まで継続して行い、土台となる力のブラッシュアップを継続して図るべきである。

●生きた英語表現に触れる努力だけでなく、既習事項の活用や応用方法も工夫しよう

日常でよく使われるが、大学入試の英語表現としては定番ではないものが散見され、制限時間の割には処理すべき英語の量も多いので、より高得点を目指すためには、日ごろから授業で触れる英語以外に、生きた英語に触れる機会を日常生活の中で設けるべきである。日常会話フレーズ集などのようなものを用意する必要はないが、基本的な単語を使った思いがけない表現などに対する耐性をつけておきたい。これは、基本単語の語感にも関わる。例えば、go と come はどのような違いがあるのか、on と in が表す状況の違いは何か、などの語感を養うことができるのだ。加えて、書店で、(大学受験コーナーではなく)一般の英語学習者向けのコーナーに並んでいる本には、このような語感をわかりやすく解説したものも多いので、活用しない手はない。大学受験という概念にとらわれず、広く「英語を身につける」という視点に立って、「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を活用しながら、書物の選定や学習方法の工夫を重ねてみよう。

●身の回りにあって簡単に手に入る生きた英語を最大限活用しよう

高等学校の履修事項をマスターしておくことは必須であるが、それ以外の学習方法で悩むことも多いだろう。そんなときには、身の回りにあるたくさんの生きた英語に触れられる媒体や情報源をうまく活用するとよい。例えば、インターネットには、教科書などには載っていない生きた英語が無数に存在し、それらへのアクセスが容易であるものも多い。動画系のSNSや(無料で)公開されているコラムを閲覧したり、情報配信サービスを活用したりして、生きた英語へのアンテナを常に伸ばしておこう。教科書やテキストでは手に入らない情報をたくさん得られるだけでなく、その情報にあたる時は、今まで学習した英語の知識や学習手法を活用することになるので、自身の英語力の向上に大いに貢献してくれる。授業や日ごろの学習を土台とし、デジタル社会で使えるものをふんだんに活用すれば、少しの工夫で多くの生きた英語に触れることができることをいつも心に留めておこう。

●過去問を一度解くことで、自分の英語力を分析しておこう

効率のよい目標設定は、今の自分の力をきちんと客観的に分析し把握しておくことである。様々な学習方法があるものの、最終目標は入試での高得点獲得である。ということは、過去問を一度解いてみて、自分が今できていることと訓練が必要なことを仕分けし、できていることは継続して学習する計画を、訓練や知識の補充が必要なことはその計画を練ることが大切である。過去問は、受験勉強の節目で自身のそのときの力を分析することと、直前期の演習としてとっておいたほうがよい。しっかりと分析に則った学習計画を立てることは、入試を突破する力を効率よく養うだけでなく、大学に入った後にも活用できる手法なのである。

世界史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
2 / 3	問1～問26	様々な戦争や対立関係とそれに関連する歴史的事象	やや易
2 / 4	問1～問26	様々な思想・宗教・文化とそれに関連する歴史的事象	標準
2 / 5	問1～問26	様々な時代の世界の出来事について	標準

●出題形式

いずれの日程においてもリード文のない一問一答形式で出題されており、設問数は26問である。全日程で8割以上出題されているのが4つの文章の正誤判定問題であり、4つの語句から適切なものを選択する問題も数問ずつ出題されている。これに加えて、2月3日・5日の問題では4つの出来事を生起順に並べる問題が1問ずつ出題された。地図や写真などの図版を使用した形式の問題は出題されていない。

解答形式はすべてマークシート方式で、記述解答問題はない。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

先史時代に関する問題はないものの、すべての日程で古代史から現代史まで幅広く出題されている。

b. 出題内容

一問一答形式で出題されているため、それぞれの設問で問われている内容に関連性はない。2月3日・4日の問題では26問中15問程度がヨーロッパに関する出題でやや多い印象であるが、中国史、インド・東南アジア史、イスラム史などもバランスよく出題されている。2月5日の問題は「○世紀の出来事について述べた文章のうちから、最も適切なものを選べ」という問い方の正誤判定問題が多く、一問の中で様々な地域の同時代の歴史的事象が問われている。どの日程においても幅広い時代・地域から出題されるため、苦手な範囲をつくらないような学習が必要である。

2月3日の問題はほとんどが政治史に関する出題であるが、2月4日・5日の問題では文学、哲学、歴史学、経済学、建築などに関する知識を問う設問も多く、文化史の対策も疎かにしてはいけない問題構成と言えよう。

●問題の傾向

他大学の入試問題の構成と比較すると、正誤判定問題の出題が多く、リード文から類推して正解を選択することもできない。したがって、歴史用語の表面的な暗記ではなく、しっかりとした知識と、文章を正確に読み取り、知識をもとに正誤を判断する思考力が求められている。

●難易度

問題の難易度は標準的で、教科書の記述を逸脱するような細かな知識は問われていない。曖昧な正誤性を問うような正誤判定問題も出題されていないため、全時代の基礎的な知識を身につけ、演習を繰り返すことで問題を解く力を養えば高得点をとることができるだろう。

世界史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

●全範囲の対策ができるように学習計画を立てよう

相山女学園大学の入試問題は古代史から現代史まで満遍なく出題される。例えば、2月4日の問題は26問中5問で冷戦期のソ連・東欧諸国や中国共産党の政策など第二次世界大戦後に関する内容が出題されており、現代史までしっかり対策ができていない受験生は高得点をとることが難しかっただろう。出題されている地域も、ヨーロッパ、東アジア、西アジアといった教科書に記述が多い地域を中心としつつ、ガーナやコンゴの独立といったアフリカ史、チェチェン紛争などについても出題されている。また、19世紀の文化史は学習事項が多く後回しにしてしまう受験生もいるが、ゾラの作品や映画の発明者が問われている。すべての時代・地域・分野の知識を身につけたうえで、苦手な範囲の復習や問題演習の時間も確保できるよう、学習計画を立てて取り組もう。

●教科書を中心にすえて学習し、歴史の大きな流れを理解しよう

相山女学園大学の入試問題は細かな知識を問われる出題はなく、教科書の内容を理解できていれば十分に正解を選択できる。したがって、より深い内容を記述した参考書を多用するより、教科書を中心にすえて学習するほうが有効な対策と言えよう。ただし、教科書を精読する際は、歴史的事象の理解に重点を置くことが大切である。世界史の学習を歴史用語の暗記ととらえている受験生もいるが、相山女学園大学では正誤判定問題が多く出題されるため、事件や制度の名称を知っているだけでは得点につながらない。教科書に太字で記述された重要語句の前後の内容を丁寧に読み、事件の対立構造・原因・結果・影響や、制度の提唱者・特徴などをしっかり確認してほしい。相山女学園大学の入試問題はリード文から類推して問題を解くことができないため、知識が曖昧だと感じている範囲は教科書を繰り返し読み、理解を深めよう。

また、2月5日の問題は「○世紀の出来事について述べた文章のうちから、最も適切なものを選び」という問い方をされている問題が多いため、年号の暗記が必要なのだろうと考えたかもしれない。しかし、年号の誤りで正誤を判断する問題は出題されていない。出来事を生起順に並べる問題も同様に厳密な年号の知識までは不要であったため、出来事のつながりを意識しながら学習し、歴史の大きな流れを理解しよう。

●正誤判定問題の演習を行い、知識をもとに考え判断する力を養おう

正誤判定問題の出題が大半であることをふまえ、相山女学園大学の出題形式に類似した問題を多く掲載した問題集や相山女学園大学の過去問に必ず取り組んでほしい。問題を解く際は何となく正解を選択するのではなく、一文ずつどの部分が誤っているのか、どのように書き換えれば正しい文章になるのかを考えよう。誤文の根拠がわからなかったり、正文への書き換えができない場合は、用語集で調べて知識を補足していこう。このような演習を繰り返すと、文章を正確に読み取り、自分の知識をもとに考え判断する力や、消去法などを用いて着実に問題を解く力が養われるはずである。

日本史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	古代～江戸時代までの外交	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1990年代までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
2/4	第1問	古代～幕末までの争い	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1990年代までの総合問題（政治・社会・文化・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・外交・社会・文化）	標準
2/5	第1問	古代～戦後までの信仰と宗教	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1940年代までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準

●出題形式

すべての日程で大問4題、小問（総解答数）37問から構成されている。問題数（量）も適切な分量となっており、時間内での解答が可能である。解答形式は全問マークシート方式であり、設問形式は文章による正誤判定問題・年代配列・語句選択・組み合わせ問題となっている。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

出題範囲は原始・古代から現代（1990年代）までの全時代が出題されている。

b. 出題内容

分野としては政治史・通史を中心に、外交、社会経済、文化などが出題され、時代をまたいだテーマ史の出題も見受けられる。

●問題の傾向

文章による正誤判定問題が全体の65%前後を占めている。1つの選択肢の文章が2行で構成され、内容もやや難しい印象をもつ受験生が多いかもしれない。しかし、設問の多くが定番かつ明確な誤りを含んでいるので、冷静に読めば、培った基本知識で正解が導き出せるように作成されている。

2023年度から出題された「背景」について問う問題が、2024年度も出題された。また新しい出題形式として、会話形式のリード文を用いた出題のほか、空欄補充には語句ではなく文章を選ばせる出題が見られた。史料を含んだ出題も見られるが、出題されている史料は教科書や史料集に掲載されている基本・頻出史料なので、普段から「何に関する史料か」、「どのような内容なのか」を意識しながら学習していれば、正解が導き出せる。また椋山女学園大学では、古代から戦後までの文化史の出題も見られる。文化史の出題は頻出であるにも関わらず、文化史に着手しないまま本番を迎えるという受験生も多い。日本史という科目は、学習して知識が身についた分だけ、得点に結びつく科目でもある。入試では、少しでも得点を積み重ねることが大切なので、文化史学習も余裕をもって対応してほしい。

●難易度

椋山女学園大学の入試の難易度は、全問が標準レベルである。「標準」とは、教科書・用語集・史料等をベースとし、基本に忠実な良問という意味であり、決して簡単な問題という意味ではない。入試のレベルは標準とはいえ、しっかりと学習ができていないと合格ライン（7～8割の正解率）を超えることは困難である。次ページの＜学習対策＞を参考にして、積極的に学習に取り組んでほしい。

日本史

(一般入試は、一般入試 A の問題のみ分析しています)

学習対策

●教科書・用語集を用いて知識の吸収と整理

総じて教科書の範囲内からの出題となっているので、まず教科書を読み「どういう出来事があったか」、「どのような人物が登場しているか」、「どのような政策を行っていたか」、「どのような結果になったか」などを確認しよう。そしてそれらを時代ごとにノートにまとめるなどして、オリジナルのテキスト（ノート）を作成しよう。そうすることで知識はもちろん、「流れ」が把握できるようになる。「流れ」が把握できるようになれば、2023年度から2024年度にかけて出題された「背景」を問う問題にもしっかりと対応できるようになる。学習の際には用語集のほかに史料集なども積極的に利用して、知識・理解の充実をはかるようにしよう。

●問題集で実戦感覚を磨く

単に知識を吸収するだけではなく、その知識を実際の入試で使えるようにしよう。吸収した知識を使える「道具（アイテム・ツール）」にするために、積極的に問題演習を行うとよい。特に、椋山女学園大学では正誤判定問題の克服が合格への鍵を握っていることから、標準的な正誤判定問題集を積極的に利用しよう（1冊ではなく、3冊程度が望ましい）。正誤判定問題への対応は、選択肢の各文を読んで、「誤った語句（人物・事項など）が入っていないか」、「各時代や政策に関するキーワードが入っているかいないか」を正確に判断できるかが鍵になる。また、数多くの問題に触れることで、「どこが狙われやすいか」なども次第にわかるようになってくる。普段の学習から「紛らわしい語句」、「何年代か（何世紀か）」、「結果がどうなったのか」などを意識しながら学習を進めていくことが重要である。日本史という科目は、学習して知識が身についた分だけ、得点にすぐに結びつく科目でもあるので、一問一答集などを常に利用して、知識が離れないようにすることが大切である。

●文化史で差をつける

椋山女学園大学では、政治史・通史を基本とした出題のほかに、近世・近現代の政治史（通史）・文化史の比重が高いことも特徴である。文化史の学習の際には、「作者・作品」はもちろんのこと、「どの時代の作品なのか」などを意識して学習を進めていってほしい。なお、文化史は、政治史・通史が終わってから学習するのではなく、鎌倉時代の政治史・通史が終わったら、鎌倉文化の学習というように、政治史・通史と連動させたほうがよい。また、2020年度から彫刻・建築・絵巻物などが写真で出題されるようになり、2024年度も出題が見られた（写真が4つ掲載され、作品と作者の組み合わせ）。2025年度以降もこの傾向は続くと思われる。出題されている写真は、多くの教科書に掲載されているものばかりである。単に作品名を覚えるのではなく、視覚的にも対応しておくことが望ましい。

●年代配列で差をつける

椋山女学園大学では出題量は少ないが、年代配列の問題が各日程で2題ほど出題されている。年代配列問題は、「知っている年代を基準に前後を特定する」、「何世紀の前半・中頃・後半か」、「何時代か」、「為政者が誰のときか」を特定することで正解が導ける。決して正確な年代を知っていないと解けないという問題ではない。年代配列の学習は、正誤判定問題にも関連・直結しているので、問題集（旧センター試験の過去問など）を利用してさらに実力を磨いていこう。

最後に、椋山女学園大学の過去問にも取り組み、万全の態勢で試験に臨んでほしい。しっかりとした理解と知識を積み重ね、自信と実力を身につけて、ぜひ合格を勝ち取ってもらいたい。

数 学

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

※第4問は【数学Ⅰ・数学A】または【数学Ⅱ・数学B】のどちらかを選択

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	数学Ⅰ 数と式／データの分析	易
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	やや易
	第3問	数学Ⅰ・A 図形の性質／図形と計量	標準
	第4問 (選択)	数学Ⅰ・A 場合の数と確率／図形と計量	やや難
	第4問 (選択)	数学Ⅱ・B 微分法と積分法／空間のベクトル	標準
2/4	第1問	数学Ⅰ 数と式／集合と命題／データの分析	易
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	やや易
	第3問	数学Ⅰ 図形と計量	やや易
	第4問 (選択)	数学Ⅰ・A 場合の数と確率／図形と計量	やや難
	第4問 (選択)	数学Ⅱ・B 微分法と積分法／空間のベクトル	標準
2/5	第1問	数学Ⅰ 数と式／集合と命題	易
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	標準
	第3問	数学Ⅰ 図形と計量	標準
	第4問 (選択)	数学Ⅰ・A 場合の数と確率／図形の性質／図形と計量	標準
	第4問 (選択)	数学Ⅱ・B 微分法と積分法／空間のベクトル	標準

●出題形式

数学は試験時間60分で大問を4題解答することになる。第1問～第3問が必答問題で【数学Ⅰ・数学A】からの出題、第4問が【数学Ⅰ・数学A】、【数学Ⅱ・数学B】の2題から1題を試験会場で選択解答する。

解答形式は、当てはまる数値または適切な選択肢の番号をマークするマークシート方式である。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

数学Ⅰ・数学A・数学Ⅱ・数学B (【数学Ⅱ・数学B】の問題は【数学Ⅰ・数学A】との選択が可能)

b. 出題内容

第1問～第3問は必答問題で数学Ⅰ・数学Aから出題されている。第4問は【数学Ⅰ・数学A】と【数学Ⅱ・数学B】の選択問題で、【数学Ⅰ・数学A】は「場合の数と確率」・「図形と計量」・「図形の性質」から、【数学Ⅱ・数学B】は「微分法と積分法」・「空間のベクトル」から出題されている。

●問題の傾向

2024年度入試の第1問は小問集合であり、小問数は3、各小問で1つの単位に関する独立した問題が出題されている。第2問と第3問は全日程において単独テーマ問題である。第4問の選択問題は問1、問2に分かれ、それぞれテーマを絞った出題になっている。

2024年度入試では「数と式」「2次関数」「図形と計量」「場合の数と確率」「微分法と積分法」「空間のベクトル」が全日程で出題された。他の入試と比較して図形に関する問題の比率が多いことも特徴的である。

●難易度

2024年度入試は第1問から第4問にかけて徐々に問題の難度が上がるような試験となった。第1問、第2問はよくある典型問題で取り組みやすいが、第3問、第4問は思考力が必要とされる問題や目新しい設定の問題が出題されており、典型パターンの解法暗記だけでは完答しにくいものとなっている。ただ、いきなり難度の高い問題が出題されるというよりも、具体例や誘導が付いている問題が多く、問題の流れに乗れるか否かもポイントである。

また、問題によっては計算量が多くなるものもあり、試験時間内で全問を解答するためには、計算力も重要になってくる。

数 学

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

概ね60分の試験時間で大問4題を解答する形であるが、試験時間に対して問題量は多めであるため、時間配分を含めた対策が必要である。

●基礎固めから始めよう

教科書の内容をしっかりと理解し、定理や公式を正確に使えるようになることが合格への第一歩となる。まずは、基本事項の確認からスタートしよう。教科書の章末問題を一通り自力で解けるようになることが1つの目標である。

また、教科書による演習と並行して教科書傍用問題集によるトレーニングも効果的である。傍用問題集で解けなかった問題は教科書に立ち返って確認するようにし、わからない部分があれば高等学校の先生などに質問してみよう。これを繰り返すことで、基礎力は完璧になる。わからないままにしておくことは最も危険である。

●実戦力を身につけよう

次に、実戦力を身につけよう。第3問以降の単独テーマ問題の中には、見慣れない設定のものもあり、典型問題の演習だけでは太刀打ちできない可能性がある。この部分の対策に関しては、大学入学共通テスト・旧センター試験の過去問や、マーク試験対策用の問題集によるトレーニングが難易度としてもちょうどよいだろう。また、模擬試験の解き直しも有効である。

近年の入試傾向の1つに「計算力を試す」ことがあげられる。計算力は、普段の取り組み方・姿勢がそのまま表れるものなので、日頃の計算ミスを「ミスをしただけ」と片付けるのではなく、『何故ミスをしたのか』を自分で考え、対策を講じていくことが肝要である。

●最後に

椋山女学園大学の入試では第1問～第3問が【数学Ⅰ・数学A】からの出題、第4問が【数学Ⅰ・数学A】、【数学Ⅱ・数学B】からの選択問題になっている。そのために、数学Ⅰ・数学Aのみの学習で受験することが可能であるが、数学Ⅱ・数学Bまで学習すると「解法の幅が広がる」「第4問で問題の選択ができる」などのメリットが存在する。予め数学Ⅰ・数学Aのみでの受験を考えている受験生は注意してほしい。

最後に、過去問の演習を通して、大問の解答の順番や大問ごとの解答時間のシミュレーションをしておこう。単純計算すると大問1つにつき15分ほどかけることができるが、第4問は問題量が多いので、時間配分はしっかり考えておくべきである。

以上の準備がすべて整えば、結果は伴ってくるはずである。健闘を祈る。

化学基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	物質の構成と化学結合(元素, 周期表, 電子配置)	やや易
	第2問	物質と化学反応式(相対質量, 物質質量)	やや難
	第3問	酸と塩基の反応(定義, $[H^+]$, 指示薬, 塩)	標準
	第4問	酸化還元反応(酸化数, 酸化剤と還元剤, イオン化傾向)	標準
2/4	第1問	物質の構成と化学結合(物質の分類, 分離, 周期表, 化学結合)	やや易
	第2問	物質と化学反応式(物質質量, 濃度, 化学反応式と量的関係)	標準
	第3問	酸と塩基の反応(中和滴定)	やや難
	第4問	酸化還元反応(酸化数, 酸化還元滴定, イオン化傾向)	標準
2/5	第1問	物質の構成と化学結合(状態変化, 原子, 化学結合)	標準
	第2問	物質と化学反応式(濃度, 化学反応式と量的関係)	標準
	第3問	酸と塩基の反応(pH, 中和滴定, 塩)	標準
	第4問	酸化還元反応(酸化数, 酸化還元滴定)	標準

●出題形式

例年通り、いずれの日程の試験も大問数は4題、解答数は40であった。出題形式は解答群の中から正答を選ぶマークシート方式である。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

化学基礎の全範囲である。

b. 出題内容

化学基礎のすべての内容から出題されている。具体的には、次のようなものがあげられる。

純物質と混合物、同素体、原子の構造、電子配置、同位体、周期表と周期律、化学結合、結晶の分類、物質質量、溶液の濃度、固体の溶解度、化学反応の量的関係、酸・塩基の定義、酸・塩基の分類、塩の性質、pH、中和滴定、逆滴定、酸化還元反応の定義、酸化数、酸化剤と還元剤、酸化還元滴定(過マンガン酸カリウム滴定、ヨウ素滴定)、金属のイオン化傾向、電池の原理

なお、相山女学園大学の入試では「化学基礎」の教科書で「発展」や「参考」などとして扱われている内容からの出題もある。

●問題の傾向

解答群の中から正答を選ぶマークシート方式であるが、いくつかの問いでは「正しいものの組み合わせは□□である。」「○○に分類されるのは□□個ある。」という形式になっており、与えられている記述すべての正誤が判断できないと正答できないものもある。また、計算問題では、前問の問いが正答できてはじめて正答を導き出せる問題もある。さらに、中和滴定や酸化還元滴定などの実験問題が頻出であり、実験器具の使い方や終点の判断の方法など実験操作に関する内容はもちろん、実験結果をきちんと考察できないと正答できない問題もある。

●難易度

問題の多くは教科書に記載されている基本的な内容であるが、前述の通り、組み合わせ問題として出題されることもあるため、難易度は標準でも、正確な知識がないと得点にならないものもある。また、計算問題に関しても、物質質量や溶液の濃度については標準的な内容であることが多いが、化学反応の量的関係、酸と塩基、酸化還元反応については応用的なテーマも出題されている。そのような問題は、「化学基礎」の教科書にあるような基本問題のみを学習してきた受験生には正解するのが難しいと思われる。具体的には水と水を含む物質の溶解度、逆滴定、ヨウ素滴定などの問題であり、高得点を取るためには相応の準備が必要である。

化学基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策**●教科書の内容を、はじめから最後まできちんと理解すること**

椋山女学園大学の入試は、「化学基礎」の教科書に記載されている内容から幅広く出題されているが、一部に「発展」や「参考」などとして扱われている内容も含まれている。2024年度は倍数比例の法則、多段階電離、塩の加水分解、逆滴定、ヨウ素滴定などである。それ以外にも、見慣れない反応についての化学反応の量的関係を考える問題も出題されていた。加えて過去3年分の難易度が高い問題を概観しておくと、2023年度は沈殿滴定、クエン酸を用いた中和滴定、ヨウ素滴定などの応用的な滴定、2022年度、2021年度と2年連続で逆滴定が出題された。また、酸化還元滴定においては、2021年度はヨウ素滴定、2020年度は酸化還元反応を用いたビタミンCの定量に関する問題が出題された。これらの問題は、化学基礎の中でも応用的なテーマの問題である。そのため、特に中和滴定と酸化還元滴定については、「化学」まで学習している生徒と同じレベルの問題まで経験しておきたい。具体的な勉強方法としては「化学基礎」の教科書の内容をきちんと理解し、最終的には大学入学共通テストの「化学基礎」や、「化学・化学基礎」と記載されている問題集の「化学基礎」の範囲の問題などを用いて、教科書にあまり記載がない反応や物質を利用した問題に慣れるなどの方法がある。

●教科書傍用の問題集で演習を繰り返すこと

語句の空所補充問題や組み合わせ問題に関しては、教科書や資料集を熟読し、化学現象を自分の言葉で説明できるようにしておけば、対策として十分である。一方、計算問題に関しては、ただ単に公式に当てはめるのではなく、式の意味や自分の求めているものを意識しながら学習を進めよう。「化学基礎」で問われる計算問題の範囲は限られているので、難度の高い応用的な問題集の前に、まず教科書傍用問題集を利用して十分に演習しておくとうい。実験考察問題に関しては、教科書や資料集をもとに実際に実験しているような感覚で操作手順を理解し、正しく結果の解釈ができるようにしておきたい。

●過去問の対策を十分に行うこと

椋山女学園大学の入試は、大学入学共通テストのように初見の問題が出題されることが多い。日程によっては、大学入学共通テストよりも難度が高いものも見られる。特に難度が高いのは、一部の計算問題と実験考察問題である。理想的な勉強の流れとしては、まず教科書傍用問題集で一通りの基本を身につける。その後、本番と同じ時間で過去問を解いてみてどのくらい解答できるかを認識し、自分の力で可能な限り高得点を取るためには、どの範囲を強化すべきか、また、実際の試験ではどのような順番で問題を解答していけばよいかを予め計画しておくことが非常に重要である。このとき、前述した通り、応用的な問題の前に、しっかりと基本的な問題が解けるかどうかを分析することは必須である。そのうえで、椋山女学園大学の入試問題は大問すべてを完答することを最初から目標にせず、より高得点を取るためには、どのレベルから潰していくべきかを考えながら勉強しよう。

生物基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・出題テーマ	難易度
2 / 3	第1問	生物の多様性と共通性	標準
	第2問	遺伝情報の複製と分配・遺伝情報の発現	標準
	第3問	自律神経系・血糖調節・生体防御	標準
	第4問	バイオーム	標準
	第5問	生態系のバランス	標準
2 / 4	第1問	細胞の構造・顕微鏡	標準
	第2問	遺伝情報の複製と分配	標準
	第3問	体液・循環・血液凝固	標準
	第4問	植生の遷移	標準
	第5問	生態系のエネルギーの流れ・生態系のバランス	標準
2 / 5	第1問	代謝・酵素・細胞内共生説	標準
	第2問	DNAの研究史・遺伝情報の発現	標準
	第3問	自律神経系・血糖調節と体温調節	標準
	第4問	バイオーム	標準
	第5問	物質循環・生態系のバランス	標準

●出題形式

出題形式はマークシート方式であり、大問数は、全日程で5題となっている。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

生物基礎の全範囲である。

b. 出題内容

生物基礎の大きな三分野「生物と遺伝子」、「生物の体内環境の維持」、「生物の多様性と生態系」から1～2題ずつが各日程で出題されており、教科書の全範囲からバランスよく出題されている。2022年度まで見られた実際の生物の写真を用いた出題が、2023年度はなかったが2024年度には復活した。生物基礎の教科書の参考欄、発展欄にしか記載がない内容が一部の設問に見られる。

●問題の傾向

総マーク数は全日程で45～46個となっている。空欄補充問題、文章正誤問題、計算問題、思考問題と多岐にわたる出題形式の問題が含まれていて、受験生の多方面への能力が問われる試験となっている。試験時間に対する分量としては標準的と言えるが、マーク数は少なくはない。また、どの日程でも計算問題が出題されており、そこで多くの時間を費やしてしまうと時間が足りなくなる恐れがある。さらに、データを読み取って考える思考型の問題も各日程で必ず出題されているため、ここでも時間が奪われてしまう可能性が考えられる。

●難易度

難易度は全体的に標準的である。しかし、2月3日の第5問や2月5日の第5問などでは、生態系分野の詳細な知識が問われていた。このように、教科書の欄外に記載されているような細かい知識が必要な問題も出題されているので、多少細かい知識でも積極的に理解していく姿勢が望ましい。また、2月4日の第5問のように、受験生が苦手を感じる生態ピラミッドの計算問題が出題されるなど、失点しやすい問題構成のために難しいと感じる受験生がいるかもしれないが、問題全体の難度が特別に高いわけではない。

生物基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策**●教科書を勉強の中心に**

＜出題傾向＞でも述べた通り、多くの問題は標準的であり、教科書に記載がある内容なので、「生物基礎」の教科書を中心に学習を進めるのが最も有効な対策である。「生物基礎」の教科書には、発展欄という生物基礎の範囲を少し超えた内容が記載されている部分がある。2024年度の問題を見る限り、遺伝暗号の解読方法など、この部分にしか記載されていない内容も出題されている(遺伝暗号の内容は新課程では発展内容ではなく、本文に記載される内容になる)。したがって、新課程入試初年度となる2025年度入試でも、生物基礎の新課程教科書の参考欄・発展欄は出題される可能性があると考えて勉強しておいたほうがよいだろう。また、全分野から満遍なく出題されているため、苦手分野を無くすことも重要となる。学部・学科系統によっては、バイオームに関する分野などは、学習を避けてしまう受験生を見かける。植物名などが多く出て大変に感じるのかもしれないが、生態系分野も含めてほぼ必ず全分野が出題されるのだから、しっかり対策をしておくべきである。

生物の勉強をする際に、教科書の太字だけを隠し、それをただ覚え込もうとする受験生が多い。初歩の学習としては否定しないが、入試対策としては不十分である。むしろ、太字の用語の定義の理解であったり、単語と単語の繋がりが大切であったりする。生物の勉強の本質は、単語の暗記ではなく現象の理解である。例えば、血糖調節の際に登場するホルモンとその内分泌腺の名前を覚えて満足するのではなく、どのようにして血糖濃度が安定化されているのか、自律神経系と内分泌系の協調的な作用を、自分の言葉で説明できるようになるまで突き詰めてみよう。それができるようになる頃には、太字の用語も自然と身についているはずである。また、解答のうえでの基礎知識を確認する際に、問題集に付随する簡単なまとめのページだけを見て終わりにしてしまう受験生も多い。受動的な学習でなく能動的な学習が、様々な生命現象の理解には有効である。他人がまとめたページを眺めるよりも、自分でまとめノートを作成したり、それを見返したりすることのほうが、ずっと学習効果が高い。

●計算問題は十分な対策を

計算問題はしっかりと対策をした受験生とそうでない受験生の間で点数の差が開きやすい。出来不出来が分かれる問題をできるようになることは、入試に向けての学習として非常に重要である。例えば、2024年度に出題された「光学顕微鏡の操作に関する計算」などは、ほとんどの高等学校の定期考査で出題される定番の計算問題である。難易度は、多くの高等学校で習うような標準的なレベルなので、高等学校での日常学習が受験対策にもなっていることを意識してもらいたい。

計算問題を苦手とする受験生が多いが、正しい方法で練習すれば誰でもできるようになるので、苦手意識がなくなるまで教科書傍用問題集などを利用して、何度も演習を繰り返すとよいだろう。その一方、2月5日の第1問や第3問などでは、型通りでなく、丁寧な問題設定の読み取りや基礎的な理解・知識の運用を要求するような計算問題も出題されている。しかし、解答にあたって特別な知識が必要なものではないから、基礎的な問題の解法に習熟することにまずは努めたい。

●思考型問題は特別な知識を要求していない

思考型の問題も、苦手と感じている受験生が多い。一見難解な思考型問題ほど、特殊な知識は要求していないものである。落ち着いて問題文を読み解けばそこに考え方のヒント、選択肢の正誤判定の根拠は必ず書かれている。ただ、ある程度の慣れが必要なのと、個人差はあるが正解を導くまでの時間がかかることが多いので、じっくりと余裕をもって思考するためにも、知識問題や定番の計算問題は手早く処理していきたい。無論、基礎となる知識がなければ考えることは不可能なのであるから、教科書に記載されている内容の理解を疎かにすることがないようにしたい。

●過去問を解いておく

マークシート方式の生物の試験では、空欄補充や文章選択の割合が高くなる。特に文章選択は、細かい知識が必要とされるものが散見され、経験を積まないと正誤判断に多くの時間を要してしまう。文章選択は、同様な問題を数多く演習すると、消去法で誤文を判定して正文を選択できるようになるなどコツがつかめて正答率が上がることも多い。また、過去問演習を通じて、自らの理解の曖昧さにも気が付けれるものである。したがって、過去問をしっかり演習し、出題パターンに慣れることが大切である。また、生物基礎の範囲はそれほど広くないので、過去に出題された内容の類似問題が繰り返し出題されることが多い。したがって、過去問を完璧にすることがそのまま本番の得点力を上げることに直結する。手に入る過去問はしっかり研究しておくようにしよう。

国語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

※第二問は現代文または古文のどちらか選択

入試日程	大問	出典	難易度
2 / 3	第一問	野間秀樹『言語存在論』	標準
	第二問 【古文】	『讃岐典侍日記』	標準
	第二問 【現代文】	池上哲司『傍らにあること——老いと介護の倫理学』	標準
2 / 4	第一問	今福龍太「境域のハイカイ」『境域の文学』	標準
	第二問 【古文】	『一休ばなし』	標準
	第二問 【現代文】	鷲田清一『〈ひと〉の現象学』	標準
2 / 5	第一問	資料1 文化審議会答申「敬語の指針」 資料2 文化庁国語課「令和元年度 国語に関する世論調査」 資料3 椎名美智『「させていただく」の使い方——日本語と敬語のゆくえ』	やや難
	第二問 【古文】	『俊頼髄脳』	標準
	第二問 【現代文】	宮本太郎「自助社会をどう終わらせるか」『自助社会を終わらせる——新たな社会的包摂のための提言』	標準

●出題形式

すべて長文形式の総合問題であり、基本的に五肢択一（一部の空所補充問題を除く）のマークシート方式である。第一問は解答必須問題の現代文であり、第二問は【古文】か【現代文】のどちらか一方を選択して解答する形式となっている。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

現代文は近代以降の文章、古文は近世以前の文章である。漢文は出題されていない。

b. 出題内容

【現代文】

例年と同様に、2024年度も基本的に1本の評論文を扱った問題であったが、2月5日の第一問のみ、複数の文章と図を用いた大学入学共通テスト新傾向型の「実用的な文章」の問題であった。ジャンルは、言語学、哲学、倫理学、政治学、文学論などであり、多彩なジャンルからの出題と言える。総じて論旨のわかりやすい文章が多く、設問の難易度も標準的であった。ただし、前述の通り2月5日の問題は複数の資料を見比べながら設問に解答する必要のある問題であり、こうした作業に馴染みのない受験生にとっては難しく感じられたかもしれない。

【古文】

2023年度の出典が平安期の作り物語と室町期の御伽草子であったのに対し、2024年度は平安期の日記と歌論、江戸初期の仮名草子であった。文字数は、2月3日が約1,300字、2月4日が約1,100字、2月5日が約1,050字となっており、2月3日がやや多かった。3日程とも別々のジャンルからの出典であったが、いずれも内容を読み取りやすい引用箇所からの出題であった。設問の難易度も標準的なものが多かった。

●問題の傾向

【現代文】

設問は、漢字、語句の意味、接続詞・副詞や語句・文の空所補充、傍線部の内容説明または理由説明、内容一致（不一致）など、現代文入試の定番問題に加え、傍線部の内容を具体例に応用させる問題や、選択肢に生徒同士の会話を用いた問題など、新たな傾向の設問も見られた。さらに2月5日の第一問では、文章と図が2つずつ用いられ、各資料同士の関係性を把握させる設問も出題された。設問数は第一問が10～11問（マーク数13～15）、第二問が8～13問（マーク数10～15）で、第二問の設問数・マーク数に日程間でばらつきが見られた。解答形式はすべてマークシート方式（原則として五肢択一）である。

第一問の文字数は約4,200字～4,400字程度となっている。設問内容は漢字の書き取り・読み、語句・慣用句の意味を問う問題、空所補充問題（接続詞・副詞・語句・短文）、内容理解に関する問題、問題文の趣旨などである。第二問の文字数は約3,200字～4,700字程度と、ばらつきがある。

前述のように、今年度は生徒同士の会話を提示し、出典の趣旨との整合性を判断させる問題や、複数の文章や図を用いた問題を出題するなど、大学入学共通テストの新型入試を意識した問題の傾向が読み取れる。従来の評論文読解の訓練に加えて、新傾向型入試の対策も行っておく必要があるだろう。

【古文】

設問数は9～12問（マーク数12～14）で、2023年度と同程度である。解答形式はすべてマークシート方式（原則五肢択一）。設問内容は、単語力を問う短文解釈、文法、文学史といった知識問題と、傍線部の解釈、内容説明など読解力を踏まえた問題である。総じて、幅広い知識と文脈を正確に読み取る力、選択肢を丁寧に吟味する姿勢を要求する問題であった。

具体的な傾向は以下の通り。

- ・ 解釈の問題は、単なる傍線部の逐語訳を課す設問だけではなく、前後の文脈を加味したうえで思考し、選択肢を選ばなくてはならないものも多い。
- ・ 内容説明問題も、単に傍線部を逐語訳していれば解答が見えてくるというものではなく、傍線部を訳したうえで、前後の文脈の中でどういうことを意味しているのかを判断しなければならない。
- ・ 文法問題は、品詞分解や識別に関する問題が出題され、まぎらわしい敬語動詞や助動詞・助詞の正確な知識を問う内容であった。
- ・ 2023年度は多様な人物が登場する作り物語や御伽草子が出題されたため、主体・客体の判断や敬意の対象を問う問題が目立ったが、2024年度は歌論の主旨や、一休宗純の「とんち」の内容を解説する問題など、論理的思考を要する問題が特徴的であった。
- ・ 文学史の問題は、例年通り3日程で出題されたが、大学入試の平均的な難易度のものであった。

●難易度

【現代文】

2024年度入試は、2月3・4日の出題は標準レベルの典型的な大学入試現代文であったが、2月5日の出題はあらかじめ大学入学共通テストの新傾向型問題や「実用的な文章」の問題に慣れておく必要があり、やや難度の高い出題であった。

【古文】

2024年度入試は、日記・仮名草子・歌論と各日程で異なるジャンルが出題されたものの、いずれも読みやすく、主旨のつかみやすい文章であったため、標準的な難易度の出題であった。

国語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

【現代文】

●筆者のイイタイコトをつかまえよう

評論の筆者は自分の抽象的な意見（イイタイコト）を読者に伝えるために文章を書く。しかし、それをそのままぶつけても大半の人には理解してもらえない。そこで、具体例をあげたり、自分のイイタイコトと対比されるものを提示し、それと比較させたりすることで、自分の意見をより明確に表現しようとする。入試の現代文は、その筆者のイイタイコト、論の展開を受験生がしっかり把握できたかどうかを確かめるために設問が作られている。よって、問題を解く際は、まず何がテーマ（話題）になっているのかを確認し、具体例と抽象的表現の区別、および筆者のイイタイコトと対比概念との区別を行いながら、筆者の論の展開を正確に把握するようにしよう。そのためには、普段から新書レベルの読書を心がけ、ただ漫然と読むのではなく、各章・各節で上記のことを意識するとよい。問題集に取り組む際も同様である。

●幅広く国語の知識を身につけよう

椋山女学園大学では、第一問・第二問を通して漢字や語句の意味など、知識を問う設問も出題されている。漢字の問題集や国語知識の問題集に取り組み、評論文で頻繁に用いられる語句などをマスターするとよい。また普段の生活や読書を通して、知らない言葉や事項に出会ったら、こまめに辞書や国語便覧で調べるなどして、語彙力や知識を身につけるよう心がけよう。漢字の問題集に取り組む際も同様である。また、文学史の問題が出題されることもあるため、問題集や国語便覧を通して、著名な文学者とその作品名、主義、流派などを覚えておこう。

●マークシート方式の問題に慣れよう

大学入学共通テスト対策の問題集やマークシート方式の私立大学対策問題集に取り組もう。ただし、やみくもに問題文を読んで、漠然とした理解のまま選択肢を選んではならない。繰り返しになるが、その文章のテーマが何で、どういう論理展開で、どんな結論（イイタイコト）を導いているのかを把握したうえで設問に取り組むこと。マークシート方式の問題は上記のことが押さえられていれば選択肢を1つに絞れるように作られている。迷ったときには、選択肢をじっくり見て考えこむのではなく、設問が何を問っているかを押さえたうえで、常に本文に立ち戻り、本文と選択肢、選択肢相互の異同を照合して判断するようにすること。また全体の設問量が多いので、過去問に取り組んで、時間配分の練習をしておくとうい。

●ややレベルの高い新書の読書を

椋山女学園大学では、日常生活では目にすることの少ない抽象的なテーマの文章が出題される。そのうえ、内容説明問題や理由説明問題に関しては、しっかり本文を理解していないと選択肢を選べないような設問がほとんどである。普段からややレベルの高い新書などを積極的に選んで読書をするとうい。

【古文】

●基礎知識の充実をはかろう

古文の問題も、単語や文法、文学史などの基礎知識を問う問題が多い。また、解釈問題はかなり意識した選択肢が正解となるものも多いが、まずは文法や単語知識で選択肢を絞り、その後に本文内容と照らし合わせて確認すれば正答できることもある。ベースは基礎知識である。

古語については300語程度を単語帳などでマスターすること。重要古語のほとんどは多義語であるので、複数の訳し方ができるようにしよう。その語の語源・語感を理解したうえで訳し方の幅を押さえ、例文の中でふさわしい訳語を選ぶ練習をすることが大切である。

文法は用言の活用を基礎として、助動詞の接続・活用・意味・訳し方、助詞の意味・訳し方、敬語の種類・用法を押さえておくこと。「なむ（なん）」「らむ（らん）」「なり」「ぬ」「に」「る・れ」「し」など頻出の識別問題にも慣れておきたい。文学史、古典常識についてもしっかりと勉強しよう。

●一人で文章を読み解くことに慣れよう

前述の基礎知識を身につけつつ、私立大学対策の問題集など、実際の問題の中で知識を使って解く練習をしよう。問題文の中で学習した単語に出会い、その文脈での意味を考えたり、傍線部の中にある重要古語、助動詞・助詞、敬語に着目して選択肢を絞ったり、あるいは解けなかった問題、間違えた箇所に含まれる単語や文法事項をもう一度辞書や文法書に立ち戻って確認したりする中で、基礎知識の定着をはかろう。また、問題集で出会った作品について国語便覧を使って文学史的な面を調べる、設問に出てきた文学史事項や古典常識について学習するなどして、副次的な知識も養っておこう。

●作品として味わおう

解釈の問題、内容理解の問題では深い読解力を要求するものもある。問題集で文章を読む際、単に語学的な分析（単純に現代語に置き換えて訳す）のレベルでとどまるのではなく、その文章の中でストーリーがどのように動いているのか、どういう事柄が起こっているのか、登場人物がどんな心理状態にあるのかを読み取るように心がけよう。会話文についても、その登場人物が「どういう意図でそんなことを言うのか」、「なぜこんな発言をするのか」まで考えて作品を味わいながら、深い洞察力を身につけてもらいたい。